

「大学生による地域の学校支援活動の組織化に関する研究」報告(その1)：平成23年度「地域の小・中学校における学習支援ボランティア活動」の現状と課題

著者名(日)	瀬戸 知也
雑誌名	静岡文化芸術大学研究紀要
巻	13
ページ	105-108
発行年	2013-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1132/00000646/

「大学生による地域の学校支援活動の組織化に関する研究」報告（その1） —平成23年度「地域の小・中学校における学習支援ボランティア活動」の現状と課題—

Organizing School Support Activities by University Students Volunteers (Part1): Present Conditions and Problems of Learning Support Activities at Primary and Middle Schools in 2011

瀬戸 知也

文化政策学部国際文化学科

Tomoya SETO

Department of international Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿は、平成23年度に大学の近隣に位置する小学校と中学校で実施された大学生による学校支援ボランティア活動の結果の報告である。学校支援ボランティア活動の意義は、(1) 小中学校にとっての「開かれた学校づくり」への貢献、(2) 教職課程履修学生にとっての教育現場体験の機会の確保、(3) 新しい学校文化の創出の可能性である。今後の課題は、(1) 学校支援ボランティアの活用の可能性の再検討、(2) ボランティア・コーディネーターの役割の再検討である。

This paper is record of the result of school support activities by university students volunteers at primary and middle schools in 2011. Significances of school support activities by university students volunteers are as follows. (1) A contribution to school management which is open to the local community. (2) Acquisition of opportunities to experience school education scene for student teachers. (3) Possibilities of creation of new school cultures. Issues for the future are as follows. (1) Reexamination of active use of volunteers of school support activities. (2) Reexamination of roles of volunteer coordinators.

1. はじめに

現在の日本社会では、多様な児童生徒のニーズへの対応や地域の特性に応じた教育課程の編成など、学校教育が担うべき役割が拡大してきている。そのような状況の中で、学校教育を支援する活動として、地域社会における学校支援ボランティア活動に期待が寄せられている。地域社会との連携や地域社会への貢献が社会的に期待されている大学においても、地域の学校における学校支援ボランティア活動への参加は重要な社会的役割の1つであると言える。大学による地域貢献にもつながるという意味で日本の高等教育行政の動向とも合致する重要な事業として位置付けることができる。

また一方で、大学生による学校支援ボランティア活動は、地域の学校教育の支援というだけでなく、教職課程を履修している学生にとっては、教育実習や介護等体験学習以外で教育現場を経験する貴重な機会であり、教員養成における重要な体験活動の機会となる効果が期待される。

本研究は、大学生による学校支援ボランティア活動を組織的な活動として発展させていくための実践と研究及び研究担当者の専門領域を生かした地域の学校教育への支援をおこなう事業等を組織化していくための基礎的な研究を目的としている。

今回の報告（その1.）では、現在実施されているいくつかの学校支援ボランティア活動の中から、平成23年度に本学の学生が近隣の小学校・中学校において実施した「学習支援ボランティア活動」の現状と課題を報告する。

2. 平成23年度「地域の小・中学校における学習支援ボランティア活動」の概要

2-1. 活動の背景

静岡文化芸術大学に隣接する小学校である東小学校及び近隣の中学校である中部中学校においては、本学開学以来

今日に至るまで、両学校の各種活動に対して、継続的に大学生による学習支援ボランティアの派遣をおこなってきた。

この学習支援ボランティア活動は、大学側からみれば、教職課程を履修する学生にとっての教育実習や介護等体験学習以外で教育現場を経験する機会としての意味がある。

一方で、地域の小学校・中学校側からみれば、各学校での活動における地域社会との連携活動として意味がある。

また、平成22年度から浜松市内のすべての小・中学校で取り組みが開始された「小中一貫教育」の推進にとっても、大学生による小・中学校における学校支援ボランティア活動は有力なサポートとなることが期待される。

2-2. 活動の概要

（1）東小学校における学習支援活動の概要

東小学校においては、これまで授業での学習支援活動や校外活動の支援、運動会の手伝い、読み聞かせボランティア等を実施してきたが、平成23年度においては、日常の授業での学習支援活動を中心におこなった。

実施手順は、東小学校側から提示された年間行事予定表と授業時間割表にもとづき小学校側が作成したサポートを希望する時間帯一覧にもとづき、学習支援活動参加希望ボランティアを募集し、名簿を作成し、それぞれの時間帯の授業の学習支援活動に従事させた。

募集対象の学生は、主として教職課程科目受講生（1年生～4年生）である。また、通常の授業時間以外での活動への支援（たとえば体力テストの手伝い等）の依頼が生じた際にはそれに応じて随時学生を募集し、支援活動に従事させた。

平成23年度東小学校における学習支援活動

・参加学生数：7名（内訳は、4年次生5名、3年次生2名）

- ・活動時期：平成23年10月25日～平成24年1月19日
- ・参加学生の活動日数（合計）：17日（1名）、16日（1名）、8日（2名）、5日（1名）、4日（2名）

（2）中部中学校における学習支援活動の概要

中部中学校においては、これまで、平成21年度、22年度と継続して「放課後補充学習会」（1年生～3年生までの「英語」と「数学」を中心とした放課後補充学習、約1時間程度）の支援に協力してきており、平成23年度も同様の事業への協力をおこなった。

実施手順は、中学校側が作成した年間行事予定表にもとづき、学生の支援を必要とする日程表を確認した上で、中学校側が作成した前年度のサポート学習内容のサンプルをもとに、学習支援活動参加希望ボランティア学生を募集し、名簿を作成し、それぞれ放課後の学習支援活動（「放課後補充学習会」）に従事させた。募集対象の学生は、主として教職課程科目受講生（1年生～4年生）である。

平成23年度中部中学校における学習支援活動

<A. 前期実施分>

- ・参加学生数：18名（内訳は、1年次生12名、2年次生1名、3年次生5名）
- ・活動時期：平成23年6月2日～7月11日
- ・参加学生の活動日数：5日（4名）、4日（5名）、3日（1名）、2日（7名）、1日（1名）

<B. 後期実施分>

- ・参加学生数：14名（内訳は、1年次生4名、2年次生4名、3年次生2名、4年次生4名）
- ・活動時期：平成23年10月31日～平成24年1月31日
- ・参加学生の活動日数：7日（3名）、6日（2名）、5日（4名）、4日（3名）、3日（2名）

（3）学習支援ボランティア活動参加学生へのアンケートの結果

A. 参加した理由（自由記述）

- ・教員を目指すにあたって学校現場・子どもたちの様子を肌で感じたかったから（4年生）。
- ・実習前に教育現場を自分の目でみて体験したいと思ったため（4年生）。
- ・ボランティアに参加することによって、地域の小・中学生と触れ合える貴重な機会になると思ったのと、自分自身にとっても良い勉強・経験になると思ったから（4年生）。
- ・小学生と触れ合い、授業のサポートができるととても良い機会だと思い、参加しました（4年生）。
- ・塾業界を志望していたので。教え方やコミュニケーションの取り方を知る機会になればと思い、参加しました（4年生）。
- ・子供のものづくりに興味があり、図工の授業の様子や教え方等が知りたかったから（3年生）。
- ・中学校の現場の受験に対しての状況を見てみたかったからです（1年生）。
- ・社会貢献、教えることに興味があったから（1年生）。

B. 今回の学習支援活動に関する感想（自由記述）

- ・最初は中学生となじめるか自分が教えたことを分かってもらえるかが不安でしたが、回数を重ねていくうちに色々な生徒と話をすることができました。勉強の方もヒントを出しながら生徒に考えさせてみた結果、徐々に分かってもらえたような気がします。自分が教えたことによって分かってもらえるということは、想像していた以上に嬉しかったです。と同時に、教えること、自分は分かっている相手に分かりやすく伝えることの難しさを感じ、とても勉強になりました。中学生と接した時間はとても充実していて、貴重な経験になりました（4年生）。
- ・生徒の人数も少なく、1対1で教えられたのでじっくりできて良かったです。生徒が求めている解説（レベル・内容をできる限りピンポイントで）を考えるのが大変でしたが、とても勉強になり、教える事の醍醐味でした。はじめはお互いに緊張していましたが、徐々に慣れてきてとても楽しい時間でした（4年生）。
- ・ボランティアで生活科や理科の授業を見学させていただく機会があり、それが大変参考になりました。低学年の子はなついてくれて嬉しかったです。高学年の子にはなかなか接し方がつかめず苦労しましたが、「ありがとうございます」と言ってくれた時は嬉しかったです（4年生）。
- ・児童たちは学ぶ意欲があり、間違えてもがんばる力があり、教えていてとても楽しかったです。今回とは別の機会ですが、運動会のボランティアもしたことがあり、とても良い経験になりました。大学生のうちに学校に入っただけで教えることができる機会があるということは本当にうれしく思いました。もっともっと多くの授業に行ってみたかったです。ありがとうございました（4年生）。
- ・同じ学年（友達）目線と、教師側の目線両方の立場で子供たちと接することができてよかった（4年生）。
- ・学校・子どもたちの様子をボランティアという立場で眺めたが、先生の発問の仕方、児童への提示、時間配分（問題の）など学ぶことが多かった。児童も様々な子がいて、楽しかった反面、付き合い方の難しさを感じた。言ってもなかなか言うことを聞かない児童、勉強を放棄している児童（放棄という言い方が悪いが）に対する働きかけは難しいと思った（4年生）。
- ・子供の想像をなるべく邪魔せずに作業をうながすことや、もっていきたい方向への導き方（興味をもたせ方）などが少し勉強になった（3年生）。
- ・生徒さんがまじめに取り組んでくれたことがよかったです。また、マンツーマンで対応した時に、理解するプロセスみたいなものを、少しですが、感じることができたように思いました（1年生）。
- ・中学校における英語教育の難しさを痛感しました（1年生）。

3. 地域の小・中学校における学校支援ボランティア活動の意義と課題

3-1. 活動の意義

（1）地域の小・中学校における「開かれた学校づくり」への貢献

「学校支援ボランティア活動」の意義については、平成8年7月の中央教育審議会答申（「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」）や平成9年の「教育改革プログラム」において「開かれた学校づくり」における意義が示されている。また、平成11年6月の生涯学習審議会答申（「学習の成果を幅広く生かす生涯学習の成果を生かすための方策について」）においては、生涯学習の視点から、学校を「地域に根ざした学校」にするために、地域住民による多様な「学校支援ボランティア活動」の充実が重要であると述べられている。

地域の教育資源の一つである大学の学生による地域の小・中学校における学習支援活動には、地域の小・中学校における「開かれた学校づくり」の一環をになう活動としての意義がみられる。

（2）教職課程を履修する学生における教育現場体験の機会の確保

教職課程を履修している学生にとっては教育実習や介護等体験学習の機会以外で教育現場を経験する貴重な機会であり、教職課程の学習経験を補強する意義がある。

現行の「教育職員免許法」にもとづく教員免許取得のための必修科目として規定されている教育実習の期間は、小・中学校の教員免許については4週間、高等学校については2週間が最低基準として設定されている（小・中学校の教員免許についてはその他に特別支援学校及び社会福祉施設において介護等体験学習を7日間履修することが規定されている）。それらの期間は、ヨーロッパ諸国における教育実習期間に比べると短期なものでしかない。日本における教員養成改革の結果として設置された「教職大学院」では長期にわたる教育実習が必修として課されているが、学部段階における「教育実習」期間を補強するための一つの方策として、教職課程を履修している学部学生による「学校支援ボランティア活動」に参加することの意義を見出すことができる。

（3）「学び続ける教員像」の確立と新しい学校文化の創出の可能性

平成24年8月の中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」では、「優れた教員の養成、研修や確保は、大学や学校の中だけで行うのではなく、学校支援に関わる関係者をはじめとする社会全体の力を結集して取り組んでいくことも必要である」と述べられており、随所で「学び続ける教員像」の確立が強調されている。

地域の小・中学校において、将来の教員を目指す大学生が学校支援ボランティア活動に従事することは、その「学び続ける教員像」の確立を促進する機会の提供ともなることが期待される。

「学校支援ボランティア活動」は、教員養成段階にある学生にとってもだけでなく、学校支援ボランティアを受け入れる小・中学校側の教員にとっても研修としての意味をもっているものと思われる。

小学校と大学または中学校と大学という学校間連携の中で「協働」することによって支援活動に従事する大学生も、支援活動を受け入れる小・中学校の教員側も、ともに互いの文化を交流させ、「学び続ける」ことによる新たな文化の創出に関わる可能性を見出すことができる。「学校支援ボランティア活動」を媒介として「学び続ける教員」たちは、新しい学校文化を創出していく可能性をもっている。

3-2. 活動の課題

（1）学校支援ボランティアの活用の可能性の再検討

現在の東小学校や中部中学校での活動は、放課後や通常の授業における学習支援ボランティア活動を中心におこなっているが、それ以外にも、「総合的学習の時間」や「特別活動」の時間、部活動等における学校支援ボランティアの積極的な活用の例が全国各地でみられる。今後の課題の1つは、放課後や通常の授業以外の場での、学校支援ボランティア活動の活用の可能性を探ることにある。

たとえば、平成22年度から浜松市内のすべての小・中学校において実施されている「小中一貫教育」の実践においても、学校間連携による教育効果の向上という観点からみると、同様な効果をもつ学校支援ボランティア活動の導入によって、相乗効果がもたらされることが期待される。

（2）学校支援ボランティア活動の組織化におけるボランティア・コーディネーターの役割の再検討

現在の東小学校や中部中学校での活動は、教育委員会等の教育行政機関によって調整された活動ではなく、それぞれの学校と地域の大学との間の学校間連携による活動として個別に実施しているものである。

全国的にみても、学校支援ボランティア活動のタイプは、教育委員会によってボランティア活動を組織するタイプと各学校が各地域で学校独自にボランティア活動を組織するタイプの2種類に大別されるが、どちらの場合も、重要になってくるのは、ボランティア活動の調整者（ボランティア・コーディネーター）の果たす役割である。

現在は、東小学校にしても中部中学校にしても、学校支援ボランティア・コーディネーターが設置されているわけではなく、各学校の教員が、ボランティア・コーディネーター役を兼ねている。大学の側にも、地域の学校支援活動を支援するボランティア・コーディネーターが設置されているわけではなく、現在は、教職課程担当教員がボランティア・コーディネーター役を兼務している状況である。

今後、安定した学校支援ボランティア活動の維持を考えるためには、地域の活動の中心となる「学校地域支援本部」等の組織体制を整備し、ボランティア・コーディネーターを中心とした活動の調整が必要になるものと思われる。

（注記：本報告は平成23年度に配分を受けた学部長特別研究費に対するものである。）

【参考論文・文献】

明石要一他編著『学校支援ボランティア " する側 " の心得帳』（明治図書、2002 年）

佐藤晴雄編著『学校支援ボランティア―特色づくりの秘訣と課題―』（教育出版、2005 年）

霜田浩信他著『学校支援ボランティアハンドブック』（ほんの森出版、2011 年）

生涯学習審議会「学習の成果を幅広く生かす―生涯学習の成果を生かすための方策について（答申）」（1999 年）

中央教育審議会「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について（答申）」（1996 年）

中央教育審議会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」（2012 年）